

◎一日目：久しぶりの新幹線、新大阪駅、「もう 20 年ぐらい乗ってないのかな え この駅こんなに大きかったかな」中高時代このあたりの電車をよく利用していた、当時は田んぼの中を電車が走り新幹線もなかった時代が懐かしい。できたばかりの新大阪駅はホームが 3 本ぐらいしかなかったような記憶がある。新幹線の乗り心地、「うん さすがに早い、我が家あたり摂津市茨木市があつという間に過ぎていく。このあたりは毎日運動に出向く安威川河原、「おおあれが これだ あれだ」と声には出さないがおいしいにはしゃいでいる幼稚さである。瞬くの間に京都を過ぎ、名古屋、静岡と走っていく。

◎新幹線には下の娘を含めた 3 人で乗り、熱海駅では上の娘夫妻と息子君 3 人が出迎えてくれた。熱海駅、それこそ半世紀以上前に来たような気もするが、まったくわからない。駅前には狭い空間に商店街が続き、ローカル電車田舎町の感じにたくさんの人が行き来する、ほとんどが観光客のようで、「熱海は今 人気の観光地」と解説も納得。商店街も駅ビル内もほとんどが観光客目当ての土産物屋、魚の干物、その他のキラキラがずらり並んでいる。熱海は温泉と漁師の街、「金目鯛と 鰯が有名 海は深いので いい魚が 獲れる」駅前の商店街はその二つの魚の干物が並んでいる。着いてすぐに、「昼飯にしましょう」と連れられ、金目鯛中心の海鮮丼をいただいた。2800 円の丼、新鮮な刺身が盛りだくさんに載っている、クチナシでレモンイエローに色がついた地元の名産ごはん、なにはともあれ美味しい。

◎我が家と同じ大きさの車なので、「運転するよ」と申し出たが、「保険が ひとり限定なので・・・」「え そんなのがあるの」「安いですよ 年 2 万弱ですよ」「え そんなに安い オレは 7 万円 払ってますよ」そんなことで 3 日間ずっと運転をお願いすることになった。

◎「熱海の 海岸 散歩して 寛一 お宮の・・・」「そんな海岸が ないじゃ ないの」泊まったホテルの大窓から海はまる見え、手前に小さい島ながら人家がありそうビルもありそう、その向こうに大きな島が見える。スマホのグーグル地図を開けるにあれば伊豆大島のような。「ここからは外海は見えない 太平洋は見えない」と聞いたが、地図を調べると、小笠原諸島まで見えるのでは、全部太平洋がまる見えの海のような。

◎一日目の午後、「丼を喰って 腹いっぱい 箱根の方が 雪が降ってるようで 今日明日も無理かな タクシーを雇うと言う 手もあるけど」「むむむもったいないね」「とにかく梅を見に行こう」「熱海梅園に行こう」と車に乗った。一般は 300 円だけれど宿泊客は 100 円だという。ここでも 6 人のうち 3 人が障害者手帳持ちなので駐車料金は 500 円だけれど、梅園入場は無料だった。梅はまだ咲き始めて間がないというか、もう何日かすると満開という雰囲気、紅白の樹々がたくさん咲き、その間にちょっとだけ黄色の蠟梅がまばらに。場内は広い、水の流れる谷を挟んで自然林が立ち並ぶ間に梅の木が花を咲かせる。ここに韓国の一軒家が建っている、日本と同様に木の骨組みと瓦の屋根、壁は漆喰で塗られている。木造建築という同様な形式なのに意匠が韓国風というのが素晴らしい。

◎MOA 美術館：「次は 尾方光琳の 紅白梅図屏風 今しか見れない これを是非」ということで車を走らせた。この絵は国宝に指定され MOA 美術館の所有らしい。最近の美術館は薄暗い、闇の中で展示物は見にくい、この美術館も薄暗い、タッチとか、息づかいとか、作者の顔が感じ取れない。薄暗い中にすすで汚れたように思われる国宝の屏風、「なんだか汚いね」という感想である。世界救世教という宗教団体、ここの創立者が美術品のコレクターで、上等の美術館まで建てたという。階をひとつ降ると、大型スクリーンにこの屏風の大きなものが動画で流れていた。「え これは美しい この色 この流れ さすが光琳」と感激した。実物ではがっかりしたのに、スクリーンを見て感動するとは、オレも焼きが回ったかな。

◎尾方光琳の紅白梅図屏風の解説に、銀箔硫化という技法が載っていた。画面バックに金箔、流水部分の白は銀箔、黒は硫化銀、この話、絵描きのオレでもわかりづらい。絵が描かれた当時を再現している絵を見て、中央流れの部分、白黒がはっきりしていて、「お きれいいじゃないか これならわかる」とオレの感想。

◎5 時にホテルに入り、食事予約は 7 時半ということでまずは風呂へ、そのあと孫君と水彩画の饗宴をした。レストラン、ほんまモノのフレンチである。これは美味かった、すごかった、大満足。ボタンエビの炙りとカブのムース、エゾシカ肉、イセエビのコンソメ、舌平目（これはその姿が出てくるといったが 姿はないがいたく美味い）・・8 品が続きパンもいただき腹いっぱいである。「こらあ いかん」と夜中に道路を歩いた、車がビュンビュン通る道、頭に白いタオルを巻いて歩いた。運動がこれでは足りないがゼロよりはましである。

◎箱根方面は積雪凍結の心配があるので、伊豆半島の、シャボテン公園に行ってみないかと進んだ。ここでは鳥や動物たちが放し飼いで餌も 200 円で売っている。動物達が身近に寄って来て大人でも楽しめた。大型の孔雀やフクロウには感激、カピパラも放し飼いでこれまた感激。すぐ隣の丸い大室山という火山の丘、これまた美しい。大室山は 4000 年前の噴火でできた 580M の山でその姿は作ったような整った形の山である。サボテンが幾種類も温室にあったが、「これは サボテンだねえ」で終わりである。

◎シャボテン公園に中南米古代の石の彫刻がたくさんあった。アメリカ大陸の文明と言われると知っているようで知らなかった。12000 年前にアジアから北まわりでやって来た先住民のモンゴロイドが、紀元前 1000 年ぐらいから 16 世紀まで文明を作った。16 世紀に入ってスペイン人が入って来て破戒した。

インカ帝国：南アメリカの太平洋側。マチュピチュで有名 13C~16C。

マヤ、アステカ：二つとも中米、古代のメキシコにはいくつかの文明があった？文字、暦、算術、天文学を発達させた。鉄器や大型家畜が居ない。石器と人力だけで巨大な神殿ピラミッドのそびえる都市を建造した。

◎歩いて帰る、まずはグーグル地図にセットして歩きだした。今パソコンの地図を見て、「最初から バス道を歩けばよかった」と反省。その時は頭の中で、バス道が左にある、海沿いの道を歩いていると思い込んでいたが、実際に歩いたのはバス道の左側で、バス道は右側にあったのだ。MOA に行く道の標識を見て、「おかしいな こっちじゃないよな」とどんどん進んだ。おおよそ熱海の街は狭い道路がくねくねでしかも上へ下へ、明治時代に発展した温泉街、「迷いやすいよね」とそのせいにしてぼやく。なんとも行き詰まり大きなホテルの人に聞いた。「遠いよ ここを こう行って また曲がって・・」なんと交番のある国道が見えだした、これで帰ると思ったら交番が思った位置の反対側にある。交差点まで来てやっと正しい地図が頭の中でできあがった、今までの頭の中の地図がまったく狂っていたのであった。ホテルも上下 8 層ぐらいだけれど途中で別棟があり迷路の感、2 泊しても、「ええと・・」と迷うような通路が続いた。駐車場も 5 層ほどあり、昨日今日と、ぐるぐる回って下って部屋に到着した。

◎下の娘が一日早く帰る、4 時代の新幹線に乗るといので熱海駅まで見送った。「晩飯は駅前で 名物のアジフライを 食べよう いったん ホテルに帰って 送迎バスで 駅前へ」「それじゃ わがまま 歩いて ホテルに行く」これが後から分かったが、身勝手なわがままだった。ホテルの送迎バスは早々がない、駅前の店も 6 時頃には全部閉まってしまう、それを聞いて大いに反省。またまた車を出してくれ、それに乗って駅前へ。何軒か開いている店で美味しい夕食にあたった。

◎上の娘夫妻が、熱海に招待してくれた、ありがたい話である、感謝かんしゃである。

- ◎「え 金剛山 藤原岳 じゃないの」何日か前から鈴鹿山系の藤原岳に福寿草を見に行こうという話があった。澤山さんが何度か連れて行ってくれた、「福寿草の 藤原岳・・・」何度も雪の間に黄色い花を見た。「花・・・」多分オレはつまらなそうな顔をしていたと思う。
- ◎4.5日前から寒波が来た。最近の天気予報氏の方々はおおいに大騒ぎ、「今季最高の」「非常に強い」「命の危険」次々恐ろしい言葉が矢継ぎ早に出てくる。時がたって災害が過ぎ去って、たしかに数字的には非常という言葉が使ってもいいかなということだけれど、「とあるところ 隣のとなりの県 地域限定じゃないか」とぼやくように、「住まいの大阪は 無事だった なんともなかった」という結果が多い。「お前は なんと身勝手な 奴」「自分が 大被害を受けたら 大騒ぎをする くせに」なんだか非難の言葉が聞こえそうである。
- ◎明日金剛山に行くという日、「あちこち 雪の情報 たかが金剛 大阪府内の千早赤阪村」と思いながらも待ち合わせ場所の久宝寺駅までの電車、登山口までの車が走る道路が大丈夫かなと心配になった。徐々に電車も通常運転になっていき、道路の通行止め区間も少なくなってきた。「これなら行けるだろう」と山の用意をした。
- ◎10時頃に水越峠に到着。なんと、車がいっぱいである、狭い道路の片側に駐車している、その駐車列がどんどん続く。週末の金剛山、人気の山、「寒波だ 雪が見られる 霧氷が見られる 氷瀑が見られる」てなことでわんさかの方々が入山しているようだ。
- ◎10:20歩き出した。林道を進む、30分も来た頃から林道が雪道になりつつ滑りだした。「おニューの チェーンアイゼン 試着」5人それぞれ、チェーンアイゼンやら6本爪アイゼンやらを着けた。オレの感想では、チェーンアイゼンの効き目はなかなかいい、装着が簡単なわりに、6本爪アイゼンとさほど変わらない装着感である。上の方で雪がやや深くなったが、この感想は変わらなかった。皆さん何年か前に5.6千円で買われたそうだが、オレの2千円と見た目は違わない。しばらくすると違いが出てくるかもである。
- ◎金剛山は若いころからの数字を入れると5回ぐらいいは来ているけれど、まったく不案内、この一年で3回来たがいっこうにわからない。標識があり水越峠から金剛山山頂とある。今季最高の寒波到来というがこのあたりの雪はしばらく前に積もったものらしい。空気はさほど冷たくない、天気は晴れたり曇ったりだが、ダウンも防寒具も脱ぎシャツとセーターで歩いている。
- ◎今回の山は、「金剛山の氷瀑」と聞いてきた、車を止めてすぐの砂防ダムに氷がへばりつき、「おお まだ歩き始めたばかりなのに これは 期待できそう」と歩き出した。700M、800M、と高度を上げていくと谷の水が凍っている、凍っている部分とその間を流れる水の部分、氷はダイナミックに形づくる、丸くなったり、尖ったり、細長くなったり、「なかなかに すごいじゃないかと」嬉しくなった。
- ◎氷瀑で一番印象に残っているのは北アルプスの乗鞍岳に行ったとき、テントを張ったその傍に、氷瀑があった。観光スポットのようで、柵のこちら側から見とれた、それはすごかった。冬の八仙に登った時も見たような気がする。ハケ岳の赤岳鉱泉小屋にはお手製の氷瀑があって、その氷瀑をカマキリ風ピッケルで登る装置があった。
- ◎金剛山のてっぺんは 休日のこともあって梅田並みの混みようである。よくまあこんなに登山好きが居るもんだと驚いた。どこかで弁当と探していたら、ちょうど昼食が終わって出発する人たちが居たので、入れ替わりに使わせてもらった。急に晴れて一瞬風が吹き木々の枝に積もっていた雪がキラキラ舞い散った。おお、と思ったがすぐにお陽さんは隠れてしまった。
- ◎「八尾で いっぱい 飲みましょう ビールを 飲もう」ということになった。八尾から千早赤阪村は富田林まで地道で行き、そのまま水越峠というルートで、高速道路を使わず、1時間ちょっと、帰りは少し混んで2時間ぐらい、同じ大阪府内なのでさほど遠くはないということなのかな。皆さんがよく知っている居酒屋らしく、7時までは飲み物が半額、鶏の焼き物、ホルモン鍋、海鮮サラダ・・・。ビールを飲み、日本酒を飲み、ハイボールを飲み、3000円也。「ご飯が要らないなら 言って」と娘に叱られた。

仏眼寺仁照阿闍梨房詫天狗女来語 20-6 くぶつげんじの にんせうあじやりの ぼうに てんぐの
つきたる をむな きたる>

◎一生懸命仏道の修行をする僧のもとに、色っぽい年増の姉さんが言い寄ってくる、「おお お助け」と逃げまわる僧の話。「なんだ そんなことか 逃げるのか おこたえ しないのか」「いい女が 言い寄ってきたら おこたえ しなければ」と思っていたら、天狗が乗り移った女で、難を逃れたという。最後に女が、「お助けください」と哀願する。「わたしは 東山の大白河に行き通っている天狗でございます」この住まいの上を何度も飛んでいます、あなた様の修行がたゆまなく鈴の音も尊く聞こえるが、これをなんとか墮落させてみよう、この女にとり憑いて、企んだことです。

◎阿闍梨：僧の位：僧を教授する僧

◎比叡山：比叡山延暦寺では創建 1200 年以來の行。7 年間山中を歩き続ける千日回峰行。一日 30 キロを歩く。5 年目に“堂入り”という一番きつい苦行、9 日間食事と水を断ち真言を唱え続ける。堂入りをすませた僧は、生き仏と呼ばれ、阿闍梨の名を授けられる。

千日回峰行は、7 年に 1000 回なら、7 年間 2 日か 3 日おきに山を 30 キロ歩く。若者が平地なら休憩をとって 6 時間ぐらいで行けると思われるが、山は倍の 12 時間以上かかるのでは、と数字で考えたがそうではない。とんでもなく苦行である。ただ山を歩くだけでもオレにはこの体力は若いころでもない。

◎まず、回峰行初百日を行い、推薦されたものが千日回峰行に進む。

3 年目までは 100 日間連続。4 年 5 年目は 200 日間連続。5 年が終わると堂入り。30 キロを 6 時間で進む。

妙な形の被り物は、未熟であることのしるし、開ききらない蓮を形どったもの。途中で行が続けられない場合は自害することになっている。短剣と六文銭と埋葬料 10 万円を携行する。

6 年目には京都赤山禅院が加わり、60 キロを 100 日間。

7 年目には 100 日間 84 キロを、次の 100 日間 30 キロ。満行後京都御所で加持祈禱を行う。

◎今は昔、京の東山に仏眼寺という寺があった。そこに仁照阿闍梨という人が住んでいたが、たいへん尊い僧であった。長年その寺で修行をいそしみ、寺から出ることもなかったが、ある時、思いがけず、七条あたりに住む金箔うちの職人の妻で、年のほど三十余り、せいぜい四十几歳の女がこの阿闍梨の僧坊にやって来た。食料袋に干飯を入れ、堅塩やワカメなども一緒に持ってきて阿闍梨の前に差し出し、「お噂で尊いお坊様でいらっしゃると聞きまして 何かお役に立ちたいものと思い お伺いしたしたのでございます お召し物など整えてお着せすることなどいたってお安い御用でございまして」と言葉巧みに言って帰っていった。＜中略＞そのあと女は度々食料などを持って訪れたので、阿闍梨はありがたく思っていた。

七月ごろ、またこの女が下女に瓜や桃など持たせてやって来た。

ちょうどその折、その僧坊の法師たちは、京に出かけていて誰もいなかった。阿闍梨がたった一人でのを見たこの女は、「このお住まいにはどなたもおいでにならないのですか 人の気配がいたしませんね」という。阿闍梨が、「いつもは一人二人いる法師が 今日是用事があった京に出かけているのじゃ そのうち帰ってくるじゃろう」というと女は、「ちょうどよい折に伺いましたわ 実を申しますと 申し上げたいことがございましてこうして何度もお伺いしたのですが いつも決まってどなたかがおいでになるので申し上げませんでした 是非ともこっそりお耳に入りたいことがございます」

女は阿闍梨の手を取り、身体をこすりつけ、「どうぞお助けください」とのしかかり抱きすくめようとする。

阿闍梨は困り切り、不動様の前に行き、数珠も砕けんばかりに押しもみ、額を板に付けて激しく礼拝する。

女は投げ飛ばされ打倒された。

女が、助けてくれという。「私は天狗です あなたを墮落させようと 女の憑りついたのです こりごりです」

染殿后為天宮被嬖乱語 20-7<そめどのの きさき てんぐの ために ねうらん せらるること>

◎藤原明子：染殿后（染殿は関白太政大臣：藤原良房の娘）美しい人だが、物の怪に常に悩んでいた。この話は格別に面白い。男と女の話、エロチックで大胆で好きな話のひとつです。

◎聖人が居た寺は、金剛山 1100M にある転法輪寺かな。最近 2.3 度ここに行ったが、寺は見えていないので次回は非。金剛山：真言宗の開祖：役小角が 1300 年前にここで修行をしたらしい。

◎本の解説に金峰山が出てきた。山上が岳のてっぺんにある立派な寺が金峰山寺。愛染明王尊があり、愛を成就する靈験あらたかな明王様だそう。近所の柳谷観音の裏山にでっかいマラを上に向けた明王が居る。今は亡き阪口さんに行った金峰山は役小角が関係しているそうである。金峰山 2600M：2 月ごろ、寒い中テントで寝た。増富温泉から入り瑞牆山と二つの山をうろうろした。

◎今は昔、染殿后と申しあげのお方は文徳天皇の御母にあたり、<中略>この後は常に物の怪にお悩みになっていたので、様々な祈祷が行われていた。そして、特に靈験著しいと評判の僧を召して、あれこれ修法を行ったが、すこしもその験がない。

ところで、大和の国葛城山の頂上に金剛山というところがあり、そこに一人の尊い聖人が住んでいた。

その聖人に参内するように仰せが下ったが、聖人は何度か断っていたが、ついに参内した。

聖人が加持祈祷を始めると、たちどころに験が現れ、侍女の懷から老狐が飛び出し倒れ臥した。

後の病は一兩日中に治った。父の大臣は喜び聖人にしばらく滞在いせよと仰せになった。

聖人が几帳の隙間から、一重の着物姿の后をかいま見た。

後の美しさに聖人は目も眩み、肝も砕け、深い愛欲の情が生じた。

聖人はすきを窺い、後の腰に抱きついた。

聖人は捕まり老にいれられた。「わしは死んで鬼になり 后と情を通じてやる」

聖人は金剛山で死に鬼になった。頭は禿髪（かぶろ）身は八尺、膚はまっ黒、目は鉢（かなまり：鉄の碗）

口には牙、赤いふんどしに、腰に槌をさし、にわかに後のそばに立った。

鬼の魂が後の正気を奪い、后はにっこり笑みを浮かべ、鬼と二人でお臥せになった。

鬼は恋しくつらい日々話を、後も嬉しそうな笑い声をたてられた。

鬼は連日同じような姿で現れ、后は慕わしいものとお思いになっている。

宮中の人々は言いようもなく悲嘆にくれた。

天皇と大臣は、高僧たちに、この鬼を降伏させるようねんごろに祈祷をするよう命じた。

祈祷の験が現れ、鬼は三か月ほど来なかった。

天皇はお喜びになり、後の様子を見ようと大臣の御殿に御幸なされた。

◎やがて天皇は御殿にお入りになり、后にお会いになって涙ながらしみじみとお話しなされると、後も深く感激なされた。そのお姿は前と少しもおかわりにならない。

するとその時、例の鬼がにわかに部屋の隅から躍り出て、後の几帳の中に入った。天皇はあきれて見ておられるうち、后は例のご様子になって御帳の中にいそいそとお入りになる。しばらくして、鬼は南面に躍り出た。

大臣・公卿をはじめ百官の者たちはみな目の当たりにこの鬼を見て恐れ惑い、あきれ果てたことだと思っていると、後もまたあとから続いて出てこられ、多くの人々の見ている前で一緒にお臥せになって、いいようもなく見苦しいことを、はばかりすることもなくおこないなされた。やがて鬼が起き上がると後も起きて御帳にお入りになる。天皇はどうする術もなくただお嘆きになるばかりで帰って行かれた。

◎9:15 たかすみ温泉駐車場を出発。空は曇っている、夕方のように暗い。所々の雪はちらほらあったが、道路上に雪は無い凍結部分もない。いつものようにダウンの上に防寒具を着ているがさほど寒くはない。

◎先日非金属タイヤチェーンを買った。去年ここに来た時には道路に10センチほど積もっていた。たかすみ温泉の近所の方が、「こんな 初めてだ ここあたりは めったに降らない たいへんだ」とぼやきながら竹ぼうきで路上の雪を掃いておられた。その時は金属チェーンを装着して駐車場までやって来た。今回の非金属タイヤチェーンは、装着が簡単で長く道路を走れる、しかも耐久性があるという歌い文句である。「え ほとんど 3万円 そらあ 痛い」とメルカリを探すと、6000円を出ている、タイヤの径もあっている。「買って試着しただけ」という説明だが、経年が書いていない、ま、いいかと山形県から送られてきたものを見て、「でかい」と驚いた。試しにつけてみようと思説明書を横にやってみたが、30分もかかってしまった。「装着簡単 というが・・・」である。買って一か月になるが、今日も使えないね。

◎高見山は霧氷で有名な山、雪の季節は行列ができるほど賑わうらしいが、今日は休みの日じゃない、天気が悪いということで、雪山登山者の車は2台しか停まっていない。少し歩くと登山口に出る、土が見えないぐらいに雪で白い。「雪の山は音が吸い込まれるね」「おおそうだね シーンだね」「歌舞伎では 太鼓を 静かに 叩くのだっけ」

◎神沢利子さんの詩:「かあさん なんだか しずかだね どうして しーんと 静かなの」「雪が 降っているのでしょう いつも こんなに 静かな日には 雪が しんしん 積もるのよ」そう言えば何回も雪かきにお邪魔した富山のりさん宅、雪がしんしん降っていた。ドスンと家が揺れる音、屋根の雪が滑り落ちる音と響きなのだ。

◎今日は新しい場所に2回車を乗り入れた。朝7時半に近鉄喜志駅で町井さんを送迎した。この駅は大阪芸大があるので来たことがあるが、駅は初めて、これで次回からすんなり来られ、吉野に向かうのも、自宅に帰るのも覚えた。次は、大日駅、自宅から行くのはもう学習できているが、八尾方面からが初めてである。近畿自動車道を鶴見ICで降り、中央環状線の右車線に大日駅に出られるルートがあるのを発見、これも学習した。

◎10:15 避難小屋を出発した。小屋ではお菓子をいただき持ってきた水をガブリ飲んだ。暑いのでダウンも脱いだ。まだまだ針葉樹林帯、階段の多い登山道をエンヤコラ登った。

◎「あれえ 古事記に 関した 看板が え もう 分岐が 過ぎたのかな」分岐がまだだと思っていたが、わからぬままに過ぎ去ったようで、もうてっぺんまで少しのところに来ていた。雪の量が増え30センチ50センチは積もっている様子。尾根道に出ると風がきつい、去年の吹雪ほどではないが、強い風だ。太い樹々の幹もメリケン粉をまぶしたようにまっ白、枝にも葉っぱにも雪がモコモコ着いている、「ミニモンスター ミンスターやね 東北の人には 笑われるかもしれないけど」強い風が横から雪を吹き付け、ちょんちょん雪がとがって行き、ヒイラギの葉のように尖った先っぽが、針のような先っぽが生えている。

◎「お 小屋だ」てっぺんの避難小屋が見えた。「おお マイナス6度だ ちみたい つめたい」「先に ちょっと てっぺんを」飯の前にすぐ横のてっぺんに行った。ここの頂上は10人もいたら満員という狭さ、半分霧がかかり、冷たい風が吹き、幹も枝も雪だらけの樹々を見て慌て小屋に潜った。潜るとはいえ扉もない小屋、床には雪が吹き込んでいいる。コップに粉スープを入れテルモスの湯を注ぎゆるゆる飲んだ、コップで手を温めた。弁当は手造りのごはんと野菜炒め、弁当は冷えてつめたいが、温かいスープを飲んだ後なので、その温かさが効いて、冷たいごはんもゆっくり味わい美味い。防寒手袋をはずし、毛糸の手袋で雪の樹々の写真を撮った。こんなに雪が着いた樹々を見るのは久しぶりである。

◎そのトゲトゲを見て、若いあんちゃんが、「ボクは 勘違い してました 風が こっちから吹いて こうな ったんじゃなく 反対側から 吹いて 雪が 積もって いったんですね」

◎3時に下ってきた。だんだんこもしんどくなってくる。10年前までは、「こんな ちっさい 山 やだよ」なんてぼざいていたが、フーフーである。6時過ぎに家に帰りついた。

◎今朝、洗濯物を干すダンになって、「ええと 天気予報は・・・」とスマホ君で調べると、10 時頃に雪ダルママークがあり、そのあとは曇りとなっている。昨日は、一日中曇りと出ていたが、だんだん晴れてきて一日の半分は太陽が出ていた。一日中曇りの予報なら、ちょろりとでも小雨が降れば洗濯ものが濡れるのはかなわないと、2 階のアトリエに干したが残念な一日だった。とはいえ 2 階のアトリエは乾燥しているので陽があたらないが 24 時間で完全に乾燥する。今日も同じような天気予報で 10 時頃に雪ダルママーク、「まさか大阪では雪は降らないね 昨日と同じように 半分晴れ 雨はないだろう」と判断して、洗濯物を庭に干した。しかし、予報通りに 10 時頃から雪が舞い始め 1 時間ほど降っていた。もちろん慌て洗濯物は家の中に取り込んだが、雪は積もることもなく地面や舗装道路が濡れたぐらいで昼前になってお陽さんがチラリ顔を出してきた。我が住まいの大阪もオレの子ども時代は冬の間に 5 センチぐらいの雪が一度ぐらいは積もり、雪ダルマを作るとか、雪合戦をした覚えがある。地球温暖化現象のせいなのか暖かい日が続き、また夏が来ればあの暑さは嫌だと思うが、寒波が来ている今はその暑さも言葉だけの絵空事である。

◎先日の高見山の雪のことが、ニュースで出ていた。登りながら、「こらあ すごい へええ 見たことがない雪景色だ」と感激した。「もっと 寒い地方 東北なんか もっともっと すごいんじゃ すさまじいんじゃ」と思っていたが、ニュースになるほどの雪景色だったらしい。霧氷が樹々にへばり着き、雪が舞い右往左往に風が吹き、その雪が樹々のあらゆるところに付着していく、ちょんちょんチョンと先が伸びエビのしっぽができあがるらしいが、針のようなトゲトゲはどうしてできたのかなあ。ネット氏：過冷却された霧粒がモノに付着する。樹霜（じゅそう）と呼ばれ針状に付着する。

◎やはり先日の高見山での話。たった 2000 円だしネットで買ったチェーンアイゼンが壊れた。帰って調べると針金部分が外れただけだったので、ペンチ 2 本を使って振じっているうちに直った。チェーンアイゼンのことは 10 年ぐらい前から知っていたが持っていなかった。「軽い雪山なら 簡単に着けられ 便利だよ」ということは聞いていたが、「大丈夫 アイゼンなしで 歩くから ずぼ足よ ピッケルさえあれば そんなものはいらないよ」とそっぽを向いていた。チェーンアイゼンは針金細工製品のようなものであるが日本製の上等なものは 5000 円以上するらしい。針金そのものの硬さや安定性によって値が信頼性が違ってくるものなのかはわからない。いずれにしても 2000 円の品物、「1 回 2 回で 潰れても いいか」という気持ちで買った。もっとも同じ日に同道の方の“六本爪アイゼン”の装着部分が切れて潰れた。これは日本製：モンベルの製品で今や多くの方が使っているが、合成ゴムの部分は耐久性が無いのかもしれない。経年 5 年ぐらいいしいがこうも簡単に潰れるとは日本製もだらしがないねえ。オレがもっている半世紀前の 12 本爪アイゼン、鉄製で重いが潰れていない、とはいえもう、こいつを使うような山にはいかないかもね。アイゼンを着けると底に雪が団子になって着き、歩きにくいなののであるが、この 12 本は 50 年にはならないが、底にプラの板がついていて雪の団子には悩まなかった。去年、12 本は重いと 6 本爪のモノを持って行ったが、雪の団子で往生した。それで帰ってすぐに底にアルミの薄板を取り付けたがそれ以降まだアルミの薄板の試運転をしていない。

◎電化製品、家電製品は寿命が 10 年とよく聞く。性能が UP するほどに中身が複雑になり壊れるのが早いようだ。昔は便器など、家が潰れるまで健在だったが、今や 10 年らしい、10 年経てば水が出ないとか水が漏れるとややこしい。電気製品も昔はプラスマイナスの電気だけだったので壊れなかったし、壊れたら修繕できた。昨今の電気製品の内部には、電子部品なるもの、なかなか賢い動きをするらしいが、その賢さが災いとなって、すぐに潰れる、10 年しか持たないということらしい。そのてん我が家の、家電君たちはよく頑張っている、「そらあ がんばってくれないと 経済がもたないもんね」洗濯機と冷蔵庫はもう 20 年ぐらいになるのかな。風呂の給湯機は 15 年になり、機能が半分潰れているが、風呂に入る分には不便が無いのでそのまま使っている。

◎ゆーちゅーぶ氏が、中国・ロシアの悪口を言うが、中国製品もそのうちどんどん良くなるんじゃないのかな、とオレは思う。ロシアもそう簡単に滅ばない、北方領土も返さない。それより日本がもっと迫力出さにゃ、ふにゃふにゃ言ってる場合じゃないよ。「金がもうかりゃ いいのだ」精神はいかんよと声高に叫びたい。

鎮西餌取法師往生語 15-28 <ちんぜいの えとりの ほふし わうじょうする >

- ◎餌取：「あれれ この言葉 少し前に 今昔氏の中に 出ていた・・・」ということで調べてみると、餌取さん、という名字の方もたくさんいる。奈良～戦国時代にかけて、鷹狩りに使う鷹や猟犬、屯倉の番犬の餌にするため、牛馬を屠って肉を採取し上納したり、皮革・肉を商った人たちの事。
- ◎餌取法師の念仏往生譚。話の中に、「世間の人の忌み嫌う牛や馬の肉を食べている」「えらいところに来てしまった 餌取の家に来ていた」「臭い匂いが狭い庵いっぱいになり立ち込める」当時の日本人は肉の調理する匂いが不快な匂いだったらしい。奈良時代から明治時代まで日本人はあまり肉食はしていなかった。
- ◎法華懺法（せんぼう：天台宗：最澄の比叡山の三井寺）梁塵秘抄：一心敬礼声澄みて 十方浄土に隔てなし、というように、法華経を読誦することにより自己の犯した罪を懺悔する行法。私たち一人一人が目・耳・鼻・舌・身・意の六根を清浄し、世のなかを清めていく。大乘仏教の精神。

◎今は昔、仏道修行をして歩く僧がおった。日本六十余国至らぬところもなく修行して歩き、諸所方々の尊い霊場を拝みながら、やがて九州にやって来た。そこの国々を巡り歩いているうちに、〇〇で、いつしか山中、道に迷い、人っ子一人見えぬ場所に来てしまった。「なんとかして人里に出たいもの」と嘆き悲しんだが、何日たってもまったくそこから出ることができない。

そうしているうち、たまたま、山の中に一つの草庵があるのを見つけた。喜んで近より、「ここに宿させていたきたい」というと、庵の中から一人の女が出てきて、「ここは人をお泊めできるような所ではありません」という。僧は、「私は修行に歩いているうち道に迷い 疲れ果ててもう一歩も歩けません だが 幸運にもここにたどり着きました たとえどうあってもお宿させてください」といった。

すると女は、「それならば今晚だけお泊りください」女は新しい筵（むしろ）や菰（こも）を取り出し、僧に清浄な食物を食べさせた。

そのうち夜になって、一人の男が何か背負ってやってきた。庵の中に入り背負った荷を下ろす。見れば法師だ。髪は三、四寸に伸び粗末な僧衣を纏っている。恐ろしくもあり汚くて、とても近寄れたものではない。僧を見て女に聞く、「ここにおいでの方はどなたじゃ」「道にお迷いになった修行者ですが 今晚だけといっておいでになるのです」法師は、「ここ五、六年の間 一度もこのような方がおいでになったことはない まったく思いもかけぬことだ」と言って、今持ってきたものを食べ始めた。見ればそれは牛や馬の肉である。＜中略＞

こうして寝もやらず様子を窺っていると、丑の時（午前 2 時）ごろになり、この法師は起き出して湯を浴び、別に置いてあった衣を着て庵を出、裏の方に行く。

「いったい何をするのだろう」僧が後をつけ立ち聞くと、なんと庵の裏手にひと間の持仏堂が造ってあり、そこには入って切り火を打ち仏前に燈明と香りを置き、まず法華懺法を行っているのだった。＜中略＞

◎次々念仏を唱え、夜が明け、そこにいた僧に語った。

わたくし、仏弟子浄尊は愚かで何もわからぬものです。戒律は破り、恥じる心もなく、悪道に墜ちようとしています。世間の人々が忌み嫌う牛馬の肉を食べ、それで命をつないで、仏道成就を願っています。

あなた様は前世からのご縁で、ここのおいでなさいました。私は〇年後〇月〇日に、この娑婆世界を捨て、極楽に往生いたします。もしあなた様が、結縁しようと思われるならその時おいでください。

◎僧は、この男を、下賤な乞食と考えていたが まことに尊い聖人であった。僧は約束をして里に向かった。

〇年後、僧はその男のもとにやって来た。「わたし 浄尊は 今夜 この身を捨て 極楽に往生いたします」尼となった女と二人、持仏堂に籠り、二人で念仏を唱えている。夜明け持仏堂が光り輝き、空に妙なる音楽が流れ、香ばしい匂いが満ち、二人は西に向かって端座し、死んでいた。